海外派遣留学プログラム報告書

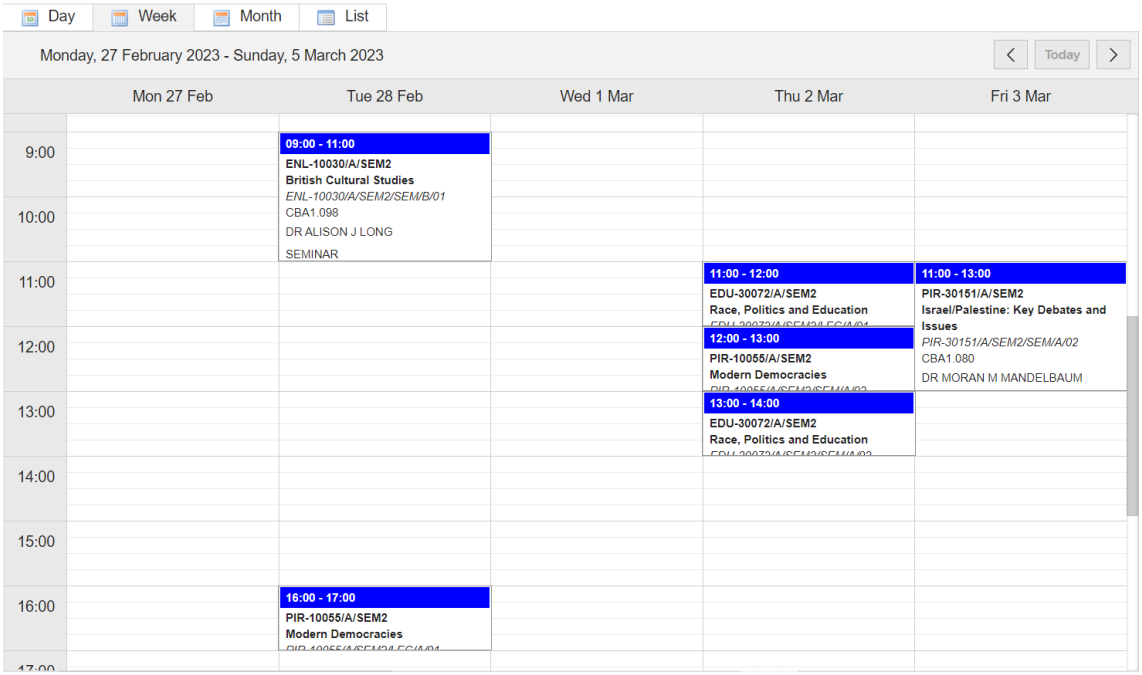
（報告期間：2023/1/18　～2023/3/5　）

１．勉学の状況

＜履修登録と選択した授業について＞

Keele 大学では、交換留学生は 1 期に最大 4 つまでの授業を履修できます。履修登録に関しては、予め希望する授業のリストを提出し、現地に着いてしばらくしてから確定する、といった具合でした。ほとんどの授業が、「講義」と「チュートリアル/セミナー」の合計 2 時間からなっており、希望を出すタイミングではそれぞれの開講時刻を知ることは難しいため、時間割がクラッシュすることはよくあります。私自身も、当初予定していた授業の一つが他の授業の時間と被ったため、キャンセルして新しく授業を探して登録しました。現地の学生は千葉大学と同じように自分でシステムに登録しているようですが、交換留学生は担当の方にメールかチャットで依頼しなければならなかったので、変更する授業を決定するのがギリギリになってしまった私は期間内に登録が完了するか不安で肝を冷やしました。

無事に履修登録が完了し、現在の時間割は以下のようになっています。



・British Cultural Studies

・Modern Democracies

・Race, Politics and Education

・Israel/Palestine: Key Debates and Issues

British Cultural Studies は、交換留学生のみを対象としており、英国の文化や生活、政治

について学びながら「英国らしさ」について考える内容となっています。Modern Democracies と Israel/Palestine: Key Debates and Issues は政治学コースの授業です。Race, Politics and Education は教育学部の授業ですが、「人種」という切り口から、政治や、教育システムの変遷・課題について学ぶ内容で、大変興味があったため受講しています。後半の二つの授業は、最高学年を対象とする授業であるということもあり、中間・期末の課題が多く、しっかり準備することが必要そうだと考えています。

私は専門を深めることに注力したかったので政治学コースの授業を中心に履修していますが、履修できる授業の範囲に制限はないので、周りの交換留学生の中には自分の大学の専門とはまったく別の領域の授業をとっている人や、幅広い分野の授業を履修している人もいます。人それぞれ自分の目的に合った授業が履修できます。

＜英語と予習について＞

授業で話されている内容を理解するために、予習は欠かせません。講義では、事前に授業のスライドを入手できることが多いので、それを印刷してわからない単語を調べ、授業の流れを把握してから臨むようにしています。教授陣は綺麗な英語を話す方が多いので、最低限これだけやっておけば、講義で困ることはないように感じます。問題はセミナーやチュートリアルです。こちらは講義の内容の確認と議論が中心になり、学生同士で意見を交換し合う機会が多く得られるのですが、他の学生の声が小さかったり、私にとっては速度が速すぎたりするため、ついていくのに精一杯です。最初は何が起きているのかわからず目を白黒させるばかりでしたが、最近ではようやく慣れてきて、何とか議論に参加できるようになってきました。そもそも前提知識が不足しているために他の学生の意見や議論の流れが理解できない、という場合もあるので、特にセミナーの比率が大きい授業では、予め指定された文献をしっかり読むようにしています。予習の大切さを実感しています。

私はリスニング力があまり高くない状態で渡英してしまいましたが、これから留学を考えている方がもしこれを読んでくださっているのなら、日本にいるうちにできる限りネイティブの速さに慣れておくことを強くお勧めします。予習が大切なのは変わらないとは思いますが、せっかく他の学生と議論する機会があるのに英語力の低さゆえにそれを生かせないのはもったいないです。私もこれからますますリスニング力を中心とした英語力の向上に注力していきたいと考えています。

２．生活の状況

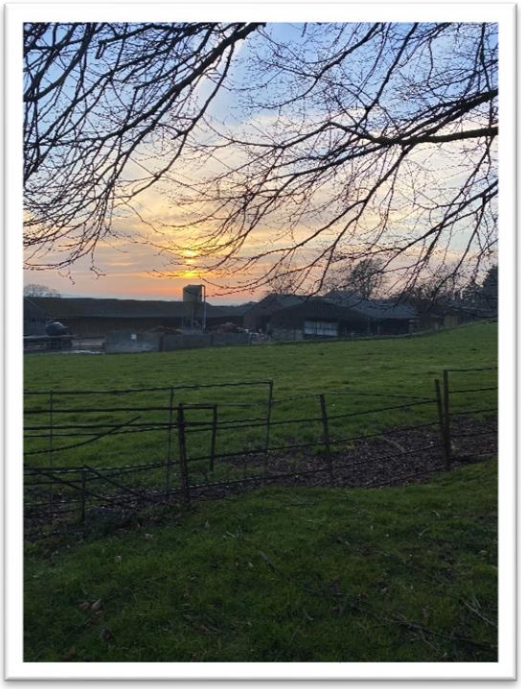
＜寮生活について＞

Keele 大学では、キャンパス内に学生寮があり、予め希望を出せば、抽選でどこかの部屋に入ることができます。私は Lindsay という寮の一部屋に住んでいます。安いほうから 2 番目の部屋ですが、自室に洗面台があり、部屋も広いので満足しています。キッチン、バ

ス、トイレが共用です。トイレがたまに流れにくいこと、毎週水曜日の昼に火災報知機のテストがあって毎回心臓が縮み上がること以外は特に不満はありません。なお、トイレにペーパホルダーはなく、トイレットペーパーは各自が毎回持ち込みなのでこれから留学や寮生活を考えている方は注意してください。

フラットメイトは 8 人います。友達の話を聞く限りでは、寮によってフラットメイトとの関係性はかなり異なるようです。私が住んでいるところは、ビジネスライクを極めたような関係で、たまにキッチンや廊下で会って挨拶したり一言二言会話をしたりする程度ですが、ある友達の寮では毎日キッチンでパーティーが開かれているようです。他にも、キッチンが自分の部屋と違う階にしかなかったり、その共有人数が 25 人だったりするところもあるみたいなのですが、同じランクの部屋だと共有人数の指定などはできないため、人間関係も含めて運に任せるしかありません。しかしながら、基本的には皆優しく、寮生活にも慣れているため、危惧していたような物を盗られるなどの摩擦は今のところ起こっておらず、大変生活しやすいです。

大学の近くにはスーパーマーケットはなく、一番近くの町までバスで 15 分ほどかかります。歩くと 1 時間ほどです。そのため、1 週間に 1 回ほどは町まで出て買い出しをし、それ以外はキャンパス内の Coop や薬局で買うようにしています。これらは基本的にコンビニのようなものなので価格は高いですが便利です。物価に関してですが、スーパーマーケットではそこまで高騰しているという印象はなく、自炊をすればほとんど日本にいるときと変わらないか、場合によってはそれより安く済むと考えられます。ただ、外食は高いため、旅行や観光に行くと想像以上にお金がかかってしまいます。



左：Lindsay 寮の近くにある牧場（？）と夕焼け。よく通る道なのですが晴れた日にここか

ら見える光景がお気に入りです。
右：大学に一番近い町（Newcastle-under-Lyme）の街並み。商店街のようになっていて生活に必要なものは大体ここで買えます。

＜友人関係について＞

到着後すぐ、オリエンテーションがあったため、そこで何人かと知り合い仲良くなることができました。最も仲のいい友達とは、その後も一緒に買い物へ行ったり旅行をしたりしています。また、様々な団体によって催されるイベントが各種あるため、定期的に参加していればそこでも知り合いを増やすことができます。私は Christian Union が主催するパーティーや集まりに参加し（キリスト教徒でなくても参加できます)、そこで「行けば必ず出会う」というような知り合いを作りました。そこで知り合う人たちは皆さんフレンドリーで、イベント外でもキャンパスで会うたびに挨拶をし、少し会話をするくらいの交流をします。知り合いが増えると心強いです。

＜Society について＞

Society とは、日本の大学でいうサークルやクラブのようなものです。Keele 大学には数多くの Society が存在します。タイミング的に入れないのではないかと危惧していましたが、春入学者向けの Society 合同説明会・登録会があり、安心して加入することができました。登録会で出会えなかった Society もありましたが、Instagram や Student Union の Web サイトなどを通じて情報を集めコンタクトをとることで、すんなり参加することができました。

私は現在、Keele Dance Society、Japanese Cultural Society、Keele Politics and IR Society の 3 つの Society に所属しています。中でもダンスは、日本でもやっていたのでとても楽しく練習することができています。先日この Society のショーがあり、そこにも参加しました。とても楽しかったです。到着したばかりの交換留学生がショーにまで参加できるものかと不安に思っていましたが、かなりオープンな Society だったため問題なく参加できました。ダンスをしていて感じたことですが、やはりスポーツは、言語の壁がある人同士でも一緒に楽しめるという特徴があります。練習の雰囲気も日本とそう変わらず、友達もできたため、安心して取り組めました。到着後すぐはホームシックに苦しめられていましたが、ダンスをするようになってからそれが心の支えとなっています。ショーの後、学期中にどれだけ練習があるのかがまだよくわかりませんが、あるだけたくさん参加していきたいと考えています。Japanese Cultural Society では、日本人留学生の友達が増え、また現地の学生とも、共通の趣味を通じて話すようになれました。前回の活動では一緒にジブリ映画の『猫の恩返し（The Cat Returns)』を鑑賞し、その後 1 時間程メンバーでお喋りをしていました。現在 Keele 大学には数多くの日本人留学生がいますが、やはり日本語で話せる関係があると心強く、就活などの情報も共有できるので、この関係性は大切にし

ていきたいと思っています。Keele Politics and IR Society は、政治学や国際関係学コースの学生ならだれでも入れる Society です。タイミングが悪くまだ初回のオリエンテーションにしか参加できていませんが、今後は積極的に活動に参加するようにしたいと考えています。

余談ですがリスです。キャンパス内にたくさんいます。

以上が留学開始後 1 か月半経った現在の状況の報告です。Keele 大学に来ている交換留学生の中でも、人によって時間の使い方が様々で、自分にとっての留学の「正解」とは何だろうと模索する毎日ですが、今回の留学の目的や当初に立てた目標を振り返りながら、今後も様々な人たちと知り合い、日々を大切に過ごしていきたいです。

海外派遣留学プログラム報告書

（報告期間：2023/3/6　～2023/5/5　）

１．勉学の状況

＜セメスター制について＞

Keele 大学は 2 学期制です。私が今回留学していた第 2 学期（春学期）は、1 月下旬～6 月上旬です。1 学期で大体 10～11 週間授業を行い、その後はテスト週間に入ります。第 2 学期の途中には、イースター休暇（3 月下旬～4 月中旬）が入ります。

今年度は、イースター休暇は 3/25～4/16 の期間で、約 3 週間でした。

＜授業の評価形式と中間エッセイについて＞

授業の評価形式は、授業によって異なりますが、中間テストや中間エッセイがある場合、大抵はイースター休暇の前半までに締め切りが来るように設定されます。私がとっていた 4 つの授業のうち、Israel/Palestine: Key Debates and Issues の授業では 1000 語の書評レポートが、British Cultural Studies の授業では 300 語以上の Reflective Analysis Report5 本が、中間課題として課されました。より大変だったのは前者です。書評レポートは、指定された図書の内 1 冊を選び、要約と批判的な分析を書くというものでした。千葉大学では取り組んだことがなかったため面くらいましたが、休暇前の授業で書評レポートを書くためのワークショップがあったため、そのやり方に則って書き上げることができました。英語で書かれた専門書を 1 冊全部読むことや、その内容を批判的に検討することは大変でしたが、いい経験になりました。

反省していることは、本来の期限までに書評レポートを提出できなかったことです。Keele 大学では、システムを通じて EC（Exceptional Circumstances）を出すことで、7 日間の期限延長を得られる仕組みがあります。学期に 3 回まで使用可能で、多くの場合で認められるため、どうしても期限に間に合わないとき、利用する学生は多いように感じます。今回は、直前に風邪をひいていたこともあり（後述します）、私もこれを利用して、何とか提出することができました。このような「救済」のシステムがあることには少なからず驚きましたが、これも個人の事情を尊重する文化の結果や、全体的に課題が難しい故の配慮なのかもしれません。とはいえ、今回の反省を生かし、今後は期限通りに提出できるように余裕を持って取り組もうと思います。

＜イースター休暇後の勉学状況について＞

イースター休暇が終わると、残すところ授業は 1～2 週間しかありません。それが終わるとテスト期間に入ります。

休暇明けに驚いたのは、授業に出席している学生が圧倒的に少なくなっていたことです。イースター休暇後で気が抜けているのか、帰省してからキャンパスに帰っていないのか、とにかく人が少なくなりました。出席は成績評価に加味されないことが多いので、そういった理由もあるか

もしれません。

また、教授の裁量次第で授業がなくなるということもあります。私が履修していた Race, Politics and Education の授業でも、最後のセミナーが当日に突然なくなりました。正確には、本来クラスの半分ずつで開講されるセミナーの後半のコマが前半と統合されて消失した、ということだったのですが、私は時間割の関係で前半のセミナーには出ることができなかったので、折角議論できるチャンスがなくなってしまい残念に思いました。これに限らず、教授のストライキで授業がなくなるということは英国ではしばしばあります。日本では考えにくい事態なので、貴重な体験をしたと思うことにしています。

２．生活の状況

＜寮生活について＞

留学開始から 3 か月以上経ち、寮での生活にもかなり慣れました。フラットメイトとの関係は相変わらずさっぱりしたものですが、よくキッチンで一緒になった 1 人とは仲を深めることができ、挨拶だけでなく互いの家のことなども少し話すようになりました。イースター休暇後に初めて会った時、お母さんが作ったというサモサを分けてくれたのですが、それが今まで食べたどのサモサよりもおいしくて感動しました。

今回は、日常生活について、前回書いていなかった情報を書こうと思います。

・シャワールームについて：浴槽はありません。基本的に共用ですが、誰しも毎日はシャワーを浴びないことと、人によって時間がずれることから、バッティングによる不便さはあまり感じません。

・洗濯について：各寮の敷地内にそれぞれコインランドリーがあります。専用のカードを最初に購入し、それを通じて毎回支払う必要があります。部屋に物を干すスペース（突起の類）はあまりないので乾燥機の利用が必須になります。

・セントラルヒーティングについて：効きにばらつきがあります。外気温がかなり低いときはよく効いてくれるのですが、3 月ごろから、少しずつ暖かくなってくると急に止まってしまいます。ほかの人の書いた留学体験記には、自室では冬でも半袖で過ごせるほど暖かいという話を多く目にしていたのですが、私はまだ長袖が手放せません（私自身はかなり寒がりなので、参考までに考えてください）。

・食べ物：あくまでも個人の感想ですが、英国らしい料理を食べると、全体的に、とても素朴な味がします。写真は SU で買ったジャケットポテトという料理です。こちらも素朴な味がしました。

・気候：入国前は、英国では雨がよく降るというイメージがありましたが、季節や場所にもよるのだと思います。Keele では、到着直後は雨が降ったり雪が降ったり晴れたり曇ったりと忙しいイメージがありましたが、暖か

くなってくるにつれ、気候も安定してきました。今年はなぜか3月に2回雪が降ったのですが、地元の友達に聞いてみても、これは珍しい現象とのことでした。空気はずっと乾燥しているので、私は寝るときのみマスクを着けて寝るようにしています。

＜風邪をひいたことについて＞

中間課題の項目で軽く触れましたが、3月中旬に風邪をひいてしまいました。ダンスソサイエティのショーに出た疲れと、急に寒くなり雪が降ったおかしな気候と、迫りくる中間課題のプレッシャーが重なったことによるものだと思います。1週間寝ていたら授業に復帰できるまで回復しました。

風邪をひいたときの対処法ですが、私は病院には行かず、日本から持参した薬に頼って治しました。というのも、Keele大学から最寄りの病院まで、かなりの距離があり、わざわざ受診しに行くよりは寝ていたほうがいいと判断したからです（もちろん、もっとおかしな症状が出ていたら、友達に頼ってでも受診しに行くつもりではありました）。このような状況があるため、Keele大学への留学を考えている方がいたら、自然治癒や持参した薬についての知識を持っておくことをお勧めします。

治癒の過程で、咳止めだけ足りなくなってしまったので、現地で買ったのど飴を舐めていました。私が愛用していたのはLocketsというのど飴です。キャンパス内の薬局で、比較的安価で手に入ります。人によってはかなり甘いと感じるようですが、私は柑橘類の皮のような苦みを感じており、その成分が力技でのどを落ち着かせてくれる感覚が気に入っていました。

慣れない環境での生活をしているため、風邪をひくことは仕方ないのかもしれませんが、寝ていた期間、授業やショーの打ち上げに行けなかったことは非常に悔やまれます。治ってからは、今まで以上に健康に配慮した生活を送るようにしています。

＜イースター休暇について＞

イースター休暇は、3月下旬～4月中旬の期間に3週間ほどある、長期休暇です。現地の学生はこの期間を利用して帰省する人が多いので、イースター休暇前になると寮から人の気配が消えていきます。

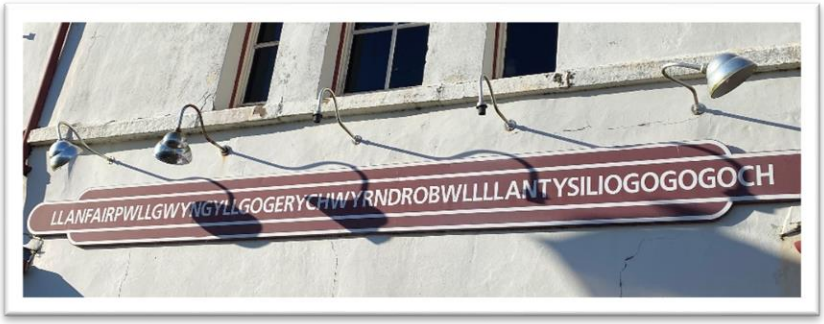
イースター休暇の過ごし方は人それぞれですが、交換留学生の中では、旅行に行く人が多いように感じます。ヨーロッパ諸国が近いため、国外に行く人もいます。私は外国旅行には行けませんでしたが、英国内で行ってみたかった場所に行ったり、友達と集まったり、ダンスソサイエティで仲良くなったメンバーとダンスを教えあったり、就職活動のためにキャリアフォーラム（ロンドンにて開催）に参加したりしました。中間課題が終わった後だったので、ゆっくりリラックスして羽根を伸ばせました。

＜旅行の例＞

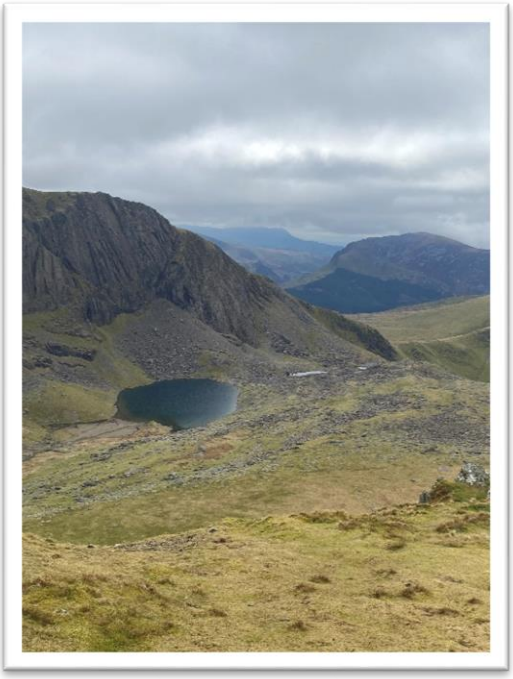
イースター休暇中に行った旅行先のうち、北部ウェールズへの旅行の様子を紹介します。

ウェールズへは、1 泊 2 日の旅程で行きました。主な目的は、世界一長い駅名の駅に立ち寄ることと、スノードン登山鉄道に乗ってウェールズで一番高い山に足を踏み入れることでした。

ウェールズでまず驚いたのが、ウェールズ語が全く分からない、ということでした。地名の看板を見ても、バスの車内放送を聞いても、本当に全くピンときません。英語を併記していることが多いため旅行はできますが、イングランドと様子が違いすぎて、独立の話が出るのも頷ける、と感じました。



左の写真が、世界一長い駅名の駅、Llanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwllllantysiliogogogoch 駅です（※調べたところ、こちらの駅名は公的に使用されているものではなく、公式にはウェールズ南部にある別の駅が英国最長の駅名を持っているという説もありました）。ウェールズ語で書かれており、全く読めません。英国に来てから初めて存在を知った駅でしたが、仮に日本に同じようなものがあったとしても、日本にいたころの自分はわざわざ見には行かなかったと思います。留学中という特殊な状況下であるからこそ、様々なことに興味を持って実際に行動できるようになったと感じました。



そして右の写真が、スノードン山に登った時の写真です。スノードン山は岩肌からして「ヨーロッパの山」という印象を持ちましたが、登山鉄道の中からでも荒々しく力強い大自然を感じることができました。4 月の初頭に訪れましたが、標高の高いところはまだかなり寒かったです。

また、ウェールズは城郭都市の多さでも有名です。私は今回 Conwy 城（左）と Caernarfon 城（右）を訪れました。中世の要塞の雰囲気を感じられました。この 2 城は『天空の城ラピュタ』に出てくる城のモデルとなったとい

うことでした。ウェールズにはほかにも同作の様々な場面のモデルとなった場所があるらしいので、今後ぜひ行ってみたいと思います。

＜就職活動について＞

私は 4 年時の春学期での留学だったため、就職活動を多少なりとも並行しながらの生活になりました。その中でも、特に 4 月上旬にあるロンドンキャリアフォーラム（日英バイリンガルの学生（正規留学・交換留学経験のある学生）を対象とした就職イベント。以下「ロンキャリ」）に照準を絞っていたため、イースター休暇中にロンドンへ行き、参加してきました。

ロンキャリの事前選考を進めるうえで最も大変だったのは、時差の問題でした。当時、日本との時差は 8 時間（サマータイム開始後だったため）でしたが、企業によっては面接枠の選択肢がかなり限られているところもあり、英国時間の深夜 2 時や 3 時に面接せざるを得ないということもありました。すべての面接がそうというわけではなく、企業によっては配慮してくれるところもありましたが、この点は留学しながら就職活動を進める上でのつらいところだと感じます。

ボストンや東京で開催されるキャリアフォーラムとは違い、ロンキャリの今年の参加企業は 19 社と少なめでした。業界もかなり絞られてしまいますが、欧州への留学経験のある学生に興味のある企業が集まるということもあり、学生にとっては業界理解を深め面接経験を積めるいい機会だと思います。私は残念ながらロンキャリ内で内定を取ることはできませんでしたが、留学したからこその将来の選択肢を発見でき、視野が広がったと感じています。（なお、ロンキャリ後に、オンラインで選考を進めていた企業から内々定をいただきました。）

留学をすると、様々な理由で卒業時期を遅らせざるを得ないという人は意外に多くいます（私もその一人です）が、遅らせたという事実が選考で不利に働くことはないと考えています。もちろん企業によってはその理由を聞かれることもありますが、しっかり目的を話すことができれば問題ありません。むしろ、留学をすることで得られるものを評価してくださるところが多いと感じました。コロナ以降オンライン選考も増え、国内本選考を留学先で受けることも可能ではあるので、就職活動を理由に留学を迷っている方がいたら、ぜひ挑戦してほしいと思います。

留学期間の半分以上が過ぎ去りました。留学生仲間とも、時間が過ぎるのがあっという間だと話している昨今です。これから、留学生活最大の山場であろう最終エッセイの執筆にも取り組まなければなりませんが、残された期間、一日一日を大切に過ごしていこうと思います。

海外派遣留学プログラム報告書
（報告期間：2023/5/6　～2023/6/5　）

1.　勉学の状況

＜最終課題について＞

イースター休暇後、授業がすべて終わると、あとはテスト期間となります。授業はないため、学生はほとんどテスト勉強やエッセイの執筆に忙殺されることになり、図書館の人口密度が非常に高くなります。私は 3 週間ほど、ずっとエッセイに集中する日々を送ることになりました。

最終課題の内容は、授業によって異なります。私の場合、「Modern Democracies」、「Race, Politics and Education」、「Israel/Palestine: Key Debates and Issues」という３つの授業で、それぞれ1200語、3000語、3000語のエッセイ執筆が、留学生向けの「British Cultural Studies」の授業ではグループワークで英国文化に関するビデオをつくることが課題として出されていました。

まず、ビデオについては、授業内で組んだグループでパブ文化について調べることを決め、大学近くの Sneyd Arms というパブ（右の写真）に行きました。メンバーにパブに詳しい子が一人いたので、その子を中心に素材を集め、人生初のビリヤードにも挑戦しました。その後、どんなところが興味深いかなどを議論し、一人ずつ担当を決めてビデオの制作に取り掛かりました。動画編集も人生で初めての体験だったため大変でしたが、いい経験になったと思います。

次に、エッセイについてですが、特に 3000 語の 2 本は困難を極めました。どちらも、問がいくつか設定されている中から 1 つ選んでエッセイの中で回答するという形式だったのですが、千葉大学でよく書いていたレポートよりも、量的にも質的にも遥かに難しく感じました。特に、長い論文の構成を組み立てるというのが大変で、教授にメールで相談したり、図書館のエッセイコーチングのサービスを利用したりしながら、何とか書き上げることができました。この2つは3年次（英国の大学では最高学年）を対象とした授業だったのですが、あとの 1 つは 1 年次を対象としていたため、比較的簡単だったように思います。1200 語という語数の少なさと、質問が具体的で回答の方法（エッセイの構成）も指定されていたことが、そう感じた理由かと思います。

エッセイを書いているときが、留学中で最も言語の壁を感じた瞬間でした。もちろん、論拠となる英語論文を調べて読むことが難しい、長い英語を正しく書くことが難しいといった難しさもあったのですが、それよりも、英語に向き合っていると頭の中にフィルターがかかっていて物事をはっきり考えられない、というような感覚がずっと付きまとっており、それがエッセイ執筆に膨大な時間がかかる一番の理由だったように思います。調べてみたところ、「外国語副作用」と呼ばれる、「外国語を話すときは言語処理に脳の処理資源を使うため一時的に思考力が落ちる」という現象があるらしいので、これが原因かもしれません。私は 1 学期間のみの留学だったので留学中に大きく改善することはできませんでしたが、もし今後留学を控えている方がこの報告書を読まれているなら、これらの障害を見越して早めからエッセイの準備をすること、また、障害を少しでもなくすために英語力を上げることの 2 点を強くお勧めします。

２．生活の状況

前半は最終課題のエッセイに集中せざるを得なかったものの、留学最終月は、それまでできなかったことをすべてやってやろうという精神で過ごしていました。日没が異様に遅い（夜 8 時でもまだ明るい）ので、一日一日を活動的に過ごすことができました。

＜図書館について＞

エッセイ執筆期間中は、ほとんど一日中、大学図書館で過ごしていました。このように大変お世話になった大学図書館について、ここで紹介したいと思います。

Keele 大学の図書館は、キャンパス内のほぼ中心に位置しています。基本的に 24 時間・週 7 日間開いており、課題の締め切りを控えた学生にとってはとてもありがたい存在です。テスト前には混雑しますが、席数が多いため図書館中どこにも空席がないというような状況にはなりませんでした。

建物は 3 階建てで、書架のほかに、自習室（右の写真）、コンピューター室、個人で集中するための部屋、グループ学習室、リラックススペースなどがあります。場所によって部屋の雰囲気や机の形が違うため、自分に合った場所で勉強することができます。また、アプリからの予約制ではありますが個人やグループで占領して使える部屋もあり、私も課題を集中して進めたいときに利用していました。意外だったのは、コンピューター室以外では基本的に温かい食べ物以外の飲食が可能であるということです。私もそうでしたが、カフェで買ったコーヒーやお菓子・軽食をお供に勉強している学生が多かったです。

図書館備え付けのパソコンも使うことができますが、注意すべきは、日本語の入力ができないというところです。英語圏のキーボードなので当然ではあるのですが変換キーがなく、日本語に対応するソフトをインストールしようとしてもうまくいきませんでした。そこで、私は大画面で快適に調べ物をしたいときや、資料を図書館の印刷機で印刷したいときには図書館のパソコンを使い、日本語で考えをまとめたい時などは自分のノートパソコンを使うようにしていました（なお、印刷にはお金がかかります。）

また、大学図書館のホームページも充実しています。蔵書検索以外にも、図書館が提供する様々なサービスの予約・利用ができるようになっています。例えば、最終課題で行き詰ったときに利用したエッセイコーチングのサービスの利用予約ができます。このサービスは大学院生が 1 対 1 でエッセイのアドバイスをしてくれるというものです。添削の依頼などはできないものの、とにかく進め方がわからなかった私にもわかりやすく丁寧に教えていただき、とても助かりました。他にも、各授業で使う教材とそのリンクがまとめてあったり、英国のテレビ番組を視聴できたりと、多岐にわたるサービスが提供されています。

大学図書館を利用する中で一番驚いたのは、フリーフルーツ（左の写真）の提供がある、ということでした。テスト期間中のみ、個数限定なのですぐになくなってしまうのですが、糖分補給になり重宝しました。私はここで初めて洋梨を食べましたが、みずみずしくておいしかったです。

＜気分転換について＞

最後に、勉強中の気分転換方法について紹介します。人によってさまざまな方法があるとは思いますが、私はKeele　Hallと池の周辺を歩くことが好きでした。Keele　Hallはかつての貴族（？）が建てた歴史的建造物で、起源は 16 世紀に遡ります。現在なおパーティーや結婚式の会場として使われており、学生もそういったイベントがないときであれば内部を見ることがで

きます。

Keele Hall の周辺には、英国らしい庭と、草原や森が広がっています。Hall の裏の丘には、暖かくなると多くの学生や地域住民が日向ぼっこに訪れます。丘に腰を下ろして友達と喋っていると、いかにも欧米の大学生だなあという感じがします。

その丘の下に、大きな池があります。自然を感じながらその周辺を歩くことが、いい気分転換になっていました。なお、Keele 大学のキャンパスはとても広いため、散歩をしようと思えばいくらでも足をのばすことができます。帰国までに隅々まで知りつくせなかったことだけが悔しいです。

Keele Hall（奥の建物）と庭（手前）→

＜the Potteries について＞

Keele 大学の周辺は the Potteries と呼ばれ、陶器産業で有名な地域です。留学初期から、最寄り駅の近くにある Pottery Museum や工場の窯の名残には足を運んでいましたが、今回は現地で有名な陶器ブランドの一つ、Emma Bridgewater というブランドの工房で、プレートのデコレーションをしました（左の写真：友達とそれぞれデコレーションした後の様子）。デコレーション作業自体が楽しかったというのもありますが、帰国前に、Keele 大学に留学したからこその体験ができたということが嬉しかったです。

＜ダンス＞

実は、勉学以外で留学中の最大の目標が、「現地の友達と一緒にダンスのショーケースを作ること」でした。趣味のために自分から友達に働きかけて何かするということはやったことがなく、受け入れてもらえるか心配でしたが、Society のショーで仲良くなった人たちに勇気を出して声をかけたところ、9 人が賛成してくれたため、実現することができました！YOASOBI の『群青』という曲の英語版を使い、5 月の 1 か月で振り入れから動画撮影まで行いました。メンバーそれぞれがテストやエッセイに追われる中、多少強引なスケジュールで進めてしまいましたが、最終的に全員が「楽しかった！誘ってくれてありがとう」などと言ってくれました。メンバーとの仲も深まり、私にとっても充実した楽しい日々が送れたので、あの時勇気を出して誘うことができて本当に良かったです。（余談ですが、編集作業は日本帰国後に行っていたため、動画が完成したのは撮影からさらに 1 か月以上経ってからのことでした。クオリティの面でも満足のいくものが作れたと思っています！）

＜Performance Ball＞

年度末になると、各 Society が活動締めのパーティー（Ball と呼ばれます）をするようになります。私は、音楽系の Society が集まる Performance Ball に参加しました。

Performance Ball は、5 月下旬、Keele Hall にて開かれました。ドレスコードがあり、特に女性の方々は色とりどりの服装に身を包んでいました。参加費は 35£と少々かかりますが、英国風のコース料理を食べ、DJ Time でクラブのような雰囲気を楽しめました。改めて、Keele 大学がいかに（良くも悪くも？）キャンパス内だけで楽しめる大学であるかを感じた瞬間でした。

嬉しかったのは、Society のメンバーに最後に出会えたことです。皆で写真を撮ったり、

様々なことについて話したりしました。その中で、自分もしっかり Society のメンバーとして認められていたのだということを実感することができました。ショーに出演した時も感じましたが、私の知る Keele 大学の Society は、どこも大抵、非常にオープンで誰でも受け入れる雰囲気があります。ここまで自分が現地の学生のコミュニティに入り込めるとは日本にいた頃は思ってもいませんでした。この特徴には、何か文化的な理由もあるのかもしれません。

振り返ってみると、あっという間の 4 か月半でした。留学に行く前は、卒業時期の関係等で留学に行くこと自体を迷ったこともありましたが、現在はこの選択をしたことを全く後悔していません。むしろ、行ってよかったと心から思っています。

1 学期間という期間も、私にとってはちょうどよかったです。もちろん、もっと長く滞在すればもっといろいろなことを学び、様々な場所に行けたのではないかとは思いますが、期間が短く限られていたからこそできたこともありました。特に、念願だったダンスのショーケースを作れたのは、「やれるのは今しかない」という思いがあったからこそです。留学という特殊な環境下で、自分から動き殻を破る体験ができたことは、一生の財産になると考えています。

最後になりましたが、お世話になったすべての方へ、感謝の意を伝えたいと思います。本当にありがとうございました。今回の経験を、将来にぜひ生かしていきたいと思います。また、再三にはなりますが、もし留学に行きたいと考えたり迷ったりしている学生さんがいたら、ぜひ挑戦してみてください。一人でも多くの学生さんが、留学に行って実りある体験ができることを祈っています。